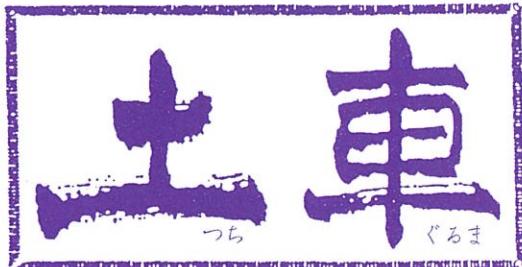


第 139 号

—令和2年9月20日発行—

公益財団法人 古代学協会だより



古代学協会所蔵資料
御即位庭上之図 丑年九月

昨年八月三十一日、当協会は公開講演会「天皇即位儀礼の儀式と沿革」を催した。会場のキヤンパスプラザ京都で実物展示したのが本図である。二〇〇三年七月、関口力先生と私の二人は、協会所蔵品図録を作成する

ための調査を行つた。その時に本図を初めて熟覧したことを思い出し、講演会で活用したいと考えたのであつた。

木版刷りの絵図を掛軸に仕立て、墨書で「御即位庭上図」と外題する。絵図部分の法量は縦四七・七cm、横五七・七cmである。銅鳥・日像・月像の幢、朱雀、

婦、剣璽内侍等の女官と、親王代・擬侍従・少納言等の男官、高御座の東奥には関白の姿（冠の部分）が描かれている。褰帳役の女王と典侍が高御座の御帳を八の字状に開いて留める前、という場面であろう。その後、執翳女嬬が座に戻り、高御座に御した天皇の姿が初めて現れることになる。

青竜・白虎・玄武の旗などを立てて莊厳した紫宸殿の南庭に群官を参列させ、天皇が殿内の高御座に御し、皇位を繼承したことを見天下に明示する即位礼の様子が描かれている。殿内の高御座の周囲には、執翳の女媛(天皇に翳を典侍、威儀命)と、(天皇に翳を女王)一同で帳(けんちよう)す役(じょ)、(天皇に翳を女王)同

婦、剣璽内侍等の女官と、親王代・擬侍従・少納言等の男官、高御座の東奥には関白の姿（冠の部分）が描かれている。賽帳役の女王と典侍が高御座の御帳を八の字状に開いて留める前、という場面であろう。その後、執翳女嬬が座に戻り、高御座に御した天皇の姿が初めて現れることになる。

図中には「丑年九月」と記されている。九月に即位礼を挙行した江戸時代の天皇は明正天皇・桃園天皇・仁孝天皇・孝明天皇の四代だが、丑年であったのは、文化十四年（一八一七）三月二十二日践祚、九月二十一日即位の仁孝天皇だけである。従つて本図は同天皇が京都御所紫宸殿で挙行した即位礼の図と見てよく、関白は一条忠良となる。日本全国の図書館・個人における同品の架蔵状況を確認し、他の歴代天皇の「御即位庭上之図」と比較研究するための資料が一点あることを報告し、識者の御参考に供したい。



図2 アグアダ・フェニックス遺跡の黒曜石製石器（撮影：青山和夫）

ヤ地域最古の公共建造物は、全マヤ文明史を通して最大の体積を有した建造物なのである。

垂直的な古典期の神殿ピラミッドは、王権を誇示する政治的道具であった。古典期の神殿ピラミッドでは水平性だけでなく、むしろ高さつまり垂直性が強調された。神殿ピラミッドは、マヤ文字で「ウイツ（山）」と呼ばれ、人工の神聖な山を象徴した。アクセスは排他的であり、王など一部の支配層に限られた。

水平性を強調した巨大基壇の源流は、オルメカ文明に求められる。前

一四〇〇～前一一五〇年頃に栄えたサン・ロレンソ遺跡は、川とその支流の氾濫原に囲まれた丘陵上に設けられ、セイバルの立地に類似する。

サン・ロレンソでは大規模な労働力を動員して、一キロメートルほどにわたって、高さ七メートルに及ぶ大量の盛土で丘陵が人工的に整形されたが巨大基壇は建造されな

いえよう。

しかしアグアダ・フェニックス遺跡では、オルメカ文明に特徴的な権力者の顔の巨石人頭像や玉座は見つからない。つまり中央集権的な王がまだいない、社会の階層化がそれほど進んでいない社会であった。

一部の研究者は、オルメカ文明がマヤ文明に大きく影響した「母なる文明」と主張する。別の研究者は、マヤ文明が独自に発展したところを指す。どちらも極論である。アグアダ・フェニックスは、サン・ロレンソが衰退し、オルメカ文明のラ・ベントナが繁栄（前八〇〇～前四〇〇年）する空白期に繁栄した。つまりアグアダ・フェニックスの人々はオルメカ文明の影響をあまり受けることなく、地域間交換を通してマヤ文

化が築いたのである。

ス遺跡の土器はセイバル遺跡の土器に酷似しており、オルメカ美術様式の土器はほとんどない。一方、サン・ロレンソに搬入された大部分の

黒曜石はメキシコ高地産であった。

私は、ハンドヘルド蛍光X線分析計

をメキシコに持ち込んで产地を同定

した。アグアダ・フェニックス遺跡

の黒曜石製石器にはメキシコ高地産

は一点もなく、全てグアテマラのマ

ヤ高地産であることがわかった（図

2）。またオルメカ文明には見られ

ないペツカリー（ヘソイノシシ）を

模つた石彫も出土している。

サン・ロレンソには、Eグルー

プの東西の軸線上にマヤ高地産の翡翠

製磨製石斧を埋納する儀礼が執行さ

れた。水平性を強調した巨大基壇

の上には、Eグルー

プの東側の基

壇は、高さ一メート

ル、長さ六三メートル、幅一六メー

トルほどであった。その西五〇メー

トルほどの基壇は、高さ二メート

ル、底辺の長さ四メートルほどで正

面（東側）に階段が設けられた。土

壇を中心に幅五〇～一〇〇メート

ル、最長六・三キロメートルに及ぶ

ラとメキシコでマヤ文

明の調査を続いている。

二〇〇五～二〇一七年

にはグアテマラのセイ

バル遺跡中心部と周辺

部において大規模で層位的な発掘調

査に挑みマヤ文明の起源と形成に関

する重要なデータが得られた。

典期中期（前一〇〇～前三五〇年

頃）に小さな村々から出発して、次

の都市を建造した。

私は一九八六年から三年間に

わたってホンジュラス、グアテマ

ラル遺跡では前九五〇年頃に公共

建造物の基壇が建造されたことが明

らかになり、米国の『サイエンス』

に発表した。従来のマヤ文明観に見

直しを迫る大きな発見である。

セイバル中心部の公共広場の東西

には、土製基壇が建造された。この

マヤ文明に特徴的な一対の公共建

造物は、グアテマラのワ

シヤクトゥン遺跡の

Eグルー

プは太陽崇

拝に関連した公共建

造物であった。

セイバル遺跡のE

グルー

プの東側の基

壇は、高さ一メート

ル、長さ六三メートル、幅一六メー

トルほどであった。その西五〇メー

トルほどの基壇は、高さ二メート

ル、底辺の長さ四メートルほどで正

面（東側）に階段が設けられた。土

壇を中心に幅五〇～一〇〇メート

ル、最長六・三キロメートルに及ぶ

ラとメキシコでマヤ文

明の調査を続いている。

二〇〇五～二〇一七年

にはグアテマラのセイ

バル遺跡中心部と周辺

部において大規模で層位的な発掘調

査に挑みマヤ文明の起源と形成に関

する重要なデータが得られた。

典期中期（前一〇〇～前三五〇年

頃）に小さな村々から出発して、次

の都市を建造した。

私は一九八六年から三年間に

わたってホンジュラス、グアテマ

ラル遺跡では前九五〇年頃に公共

建造物の基壇が建造されたことが明

らかになり、米国の『サイエンス』

に発表した。従来のマヤ文明観に見

直しを迫る大きな発見である。

セイバル中心部の公共広場の東西

には、土製基壇が建造された。この

マヤ文明に特徴的な一対の公共建

造物は、グアテマラのワ

シヤクトゥン遺跡の

Eグルー

プは太陽崇

拝に関連した公共建

造物であった。

セイバル遺跡のE

グルー

プの東側の基

壇は、高さ一メート

ル、長さ六三メートル、幅一六メー

トルほどであった。その西五〇メー

トルほどの基壇は、高さ二メート

ル、底辺の長さ四メートルほどで正

面（東側）に階段が設けられた。土

壇を中心に幅五〇～一〇〇メート

ル、最長六・三キロメートルに及ぶ

ラとメキシコでマヤ文

明の調査を続いている。

二〇〇五～二〇一七年

にはグアテマラのセイ

バル遺跡中心部と周辺

部において大規模で層位的な発掘調

査に挑みマヤ文明の起源と形成に関

する重要なデータが得られた。

典期中期（前一〇〇～前三五〇年

頃）に小さな村々から出発して、次

の都市を建造した。

私は一九八六年から三年間に

わたってホンジュラス、グアテマ

ラル遺跡では前九五〇年頃に公共

建造物の基壇が建造されたことが明

らかになり、米国の『サイエンス』

に発表した。従来のマヤ文明観に見

直しを迫る大きな発見である。

セイバル中心部の公共広場の東西

には、土製基壇が建造された。この

マヤ文明に特徴的な一対の公共建

造物は、グアテマラのワ

シヤクトゥン遺跡の

Eグルー

プは太陽崇

拝に関連した公共建

造物であった。

セイバル遺跡のE

グルー

プの東側の基

壇は、高さ一メート

ル、長さ六三メートル、幅一六メー

トルほどであった。その西五〇メー

トルほどの基壇は、高さ二メート

ル、底辺の長さ四メートルほどで正

面（東側）に階段が設けられた。土

壇を中心に幅五〇～一〇〇メート

ル、最長六・三キロメートルに及ぶ

ラとメキシコでマヤ文

明の調査を続いている。

二〇〇五～二〇一七年

にはグアテマラのセイ

バル遺跡中心部と周辺

部において大規模で層位的な発掘調

査に挑みマヤ文明の起源と形成に関

する重要なデータが得られた。

典期中期（前一〇〇～前三五〇年

頃）に小さな村々から出発して、次

の都市を建造した。

私は一九八六年から三年間に

わたってホンジュラス、グアテマ

ラル遺跡では前九五〇年頃に公共

建造物の基壇が建造されたことが明

らかになり、米国の『サイエンス』

に発表した。従来のマヤ文明観に見

直しを迫る大きな発見である。

セイバル中心部の公共広場の東西

には、土製基壇が建造された。この

マヤ文明に特徴的な一対の公共建

造物は、グアテマラのワ

シヤクトゥン遺跡の

Eグルー

プは太陽崇

拝に関連した公共建

造物であった。

セイバル遺跡のE

グルー

プの東側の基

壇は、高さ一メート

ル、長さ六三メートル、幅一六メー

トルほどであった。その西五〇メー

トルほどの基壇は、高さ二メート

ル、底辺の長さ四メートルほどで正

面（東側）に階段が設けられた。土

壇を中心に幅五〇～一〇〇メート

ル、最長六・三キロメートルに及ぶ

ラとメキシコでマヤ

「日本考古學協会第四回総会次第」

本資料は昭和二十四年（一九四九）十月二十九日、三十日の二日間、京都大学人文科学研究所及び京都大学文学部教室において開催された日本考古學協会第四回総会の次第である。縦二十五・四cm、横三十六・〇cmの更紙に謄写版で印刷されている（写真は一部拡大）。右半分の文字が判読しづらいのは、裏面の黒インクによるメモが透けているためである。メモは、古代ギリシアのレキュトス（*Lekythos*、香油容器）の外形や、「Cimagraph」、「サイマグラフ（略称マツコ）」などで、実測に関する内容が手早く書かれている。

昭和二十三年（一九四八）四月二日に発足した日本考古學協会は、当初年二回総会を開くこと（「日本考古學協会會則」第九條）、一回は東京、他の一回は地方において開催すること（「會員申合事項」四）としていた。このため、第一回から第七回までは東京国立博物館と京都大学が交互に会場となっている。

十月二十九日の午前九時から正午までが総会で、藤田亮策（一八九二—一九六〇）委員長による開会の辞に始まり、庶務報告（駒井和愛）、

会計報告（杉原莊介）と続く。四番目の特別委員会報告のうち、登呂遺跡調査特別委員会は日本考古學協会設立と同時に設置。昭和二十四年（一九四九）五月の第三回総会で、「繩文式文化の編年的研究特別委員会」（山内清男）、「上代古墳の綜合的研究特別委員会」（梅原末治）及び「日本に於ける考古學研究の現状調査」（藤田亮策）が新たに創設された。三年目の調査を終えた登呂遺跡調査特別委員会以外は発足から半年も経過していないことから、総会では調査方針などを報告したものと思われる。

特別委員会報告に続き八幡一郎（一九〇一—一九八七）が「財團法人組織の件」を説いていたことは興味深い。発足当初から、日本考古學協会の社会的乃至財政的安定化の道を模索していたことが伺える。審議は新会員推薦と続き、水野清一博士（一九〇五—一九七一）による閉会挨拶で午前の部が終わる。

午後は十三時再開で十六時まで九本の研究発表が行われた。特筆すべきは七番目の杉原莊介博士（一九一三—一九八三）による「上

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

し、石器について説明を受ける。予備調査の必要性を感じた杉原莊介はその場で調査計画の打ち合わせを行い、三日後の十一日に予備調査を敢行。調査終了の十分前に杉原莊介はその場で調査計画の打ち合わせを行い、三日後の十一日に予備調査を敢行。調査終了の十分前に杉原莊介はその場で調査計画の打ち合わせを行った。三年目の調査を終えた登呂遺跡調査特別委員会以外は発足から半年も経過していないことから、総会では調査方針などを報告したものと思われる。

（5）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

（6）

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

し、石器について説明を受ける。予備調査の必要性を感じた杉原莊介はその場で調査計画の打ち合わせを行った。三年目の調査を終えた登呂遺跡調査特別委員会以外は発足から半年も経過していないことから、総会では調査方針などを報告したものと思われる。

（7）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（8）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（9）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（10）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（11）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（12）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（13）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（14）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（15）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（16）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（17）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（18）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（19）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（20）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（21）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（22）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（23）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（24）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（25）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（26）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（27）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（28）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（29）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（30）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（31）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（32）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（33）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（34）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室で芹澤長介（一九一九—二〇〇六）を介して相澤忠洋と面会

（35）

野岩宿遺跡調査予備報告」である。岩宿遺跡は群馬県みどり市笠懸町、赤木山麓の末端に位置する岩宿時代（旧石器時代）の遺跡で、昭和二十一年（一九四六）十一月、相澤忠洋（一九二六—一九八九）により発見された。

昭和二十三年（一九四八）九月八日、杉原莊介は明治大学考古学研究室



五一廣場東漢簡牘

のための食料調達を担当する責任者からの報告を含んでいました。任務中、輸送業者である船頭が借金を理由に地域の役人に身柄を拘束されてしまつた、兵糧を積んだ船が動かせません、何とかしてください、と。別の木簡では、殺人事件の証人が拷問をうけ嘘の証言をし、そのせいでの捜査が混乱して困っている。また、取り調べの指示を上から受けたけれど、指示命令書類を受け取った時にはもう期日が過ぎていました、もうしわけありません。農地の測量調査中、担当者が土地の持ち主の一族に殴られて、犯人は逃走中、など。役人たちが、職務の上でさまざまなトラブルに関わり、上から命令や叱責を受け、報告や詫びをいれるさまを読むことができました。

その時公開されていたのは、十数点でしたが、学術的な意義は大きいことに気づきました。歴史書が言及しない地方統治の実情をうかがい、先行研究を裏付け修正する可能性があります。ただそれと同時に、私

は役人たちが職務をこなしたり手を抜いたり、予期せぬ事態にあたふたする様子を面白く感じました。一九〇〇年前の人々の声が聞こえるような、そんな印象を受けたからです。

冒頭で紹介した木簡は火災の証言でした。取り扱われる事件は、金銭トラブルや、傷害事件など、好ましくないものですが、大それた事件は今のことろ見あたりません。現代でいう「三面記事」のようなローカルで身近なものがほとんどのようですが、英雄的的人物もでてこないでしょうし、まったく華々しくない。事件の当事者と、証人や、捜査担当者がどちらかを述べているばかりです。だからこそ、一九〇〇年前の人々も、三面記事的事件の起ころうな日常と社会の中で生きていたことを改めて認識しました。そして、この史料を通して、後漢時代の人たちの活動、社会のありさまを知りたくなりました。

す。私が大学の学部生だったころ、そういった分野の成果が、比較的的一般向けの書籍としてもたくさん出版されるようになつてきました。大学の書店には文庫本・新書本いろいろとならんでいましたが、そこに西洋史や日本史のものはあるても、中国の古い時代に関するものは見あたらんませんでした。私は美術書や展覧会などがきっかけで、秦や漢のこの美術工芸品、器物にも関心を持つていたので、考古学的な資料が当時の人々の美意識や生活を伝えてくれるのに、使用した人々の人生、日當書籍が見あたらないことに、さみいような、もの足らないような思いを漠然と抱いていました。

史料状況からすれば、日本やヨーロッパの中世以降に対するような研究は、中国古代史では難しいのは当然です。史料は歴史書が中心ですのでも、関心は政治や制度にかたよりがちです。そのころに木簡に関する研究は十分ありましたが、当時発見されていなくては、あまりその方面の

人が経験するもめ事 トランブルに開
わります。イレギュラーな事態では
あります、日常と社会そのもので
す。木簡の文書は、書類の頭から終
りまでが完全な形で発見されること
はまれで、断片しか読めないことが
ほとんどです。仮に文書の全体を読
むことができたとしても、事件の全
体ではないし、そもそも役人の手に
よる以上、事件当事者の生の声では
ありません。それでも一九〇〇年も
前の人々が直面した事件について、当
時の人々が書いた記録を読むことがで
きるのは、奇跡のようなものです。

現在の三面記事の事件から、政治
や経済などの大きな問題を直接論じ
るのは難しいものの、何らかに私た
ちのいきる社会を反映するように、
五一広場東漢簡牘の中で述べられる
一九〇〇年前のローカルな事件記録
は、後漢時代の当事者たちのもので
す。読解するだけで精一杯なこともあります
が、なんとかこの史料から
一九〇〇年前の人々と社会を理解す
る手がかりをつかみたいと考えてい
ます。



一九〇〇年前の事件記録

お世話になつています。ここでは、私の研究について紹介をさせてください。

まずはこちらの史料をみてください。原文は漢文で、七一文字あります。だいたいの意味に訳してみまし

弱いことを言つて いました。私は
他と一緒に動き出し、戸口をでて、
屋敷の裏に行くと、火は廁の上に
あり、適と康が建物に上がって火
を消し止めようとするのを見まし
た。他に水を取りにやらせると、
他は井戸の上にとりついて、水を
汲みました。火は延焼して賓の屋
敷に及んでおり、もはや消し止め
ることは出来ませんでした。他は
家財道具を持ち出しましたが、ま
だ全てを確保できないうちに、火
はもう他たちの屋敷に及びまし
た。火がどこからおきたのかわか
りません。……

私が述べられています。時代は一世紀の初め。中国の長沙
紀末から二世紀の初め。中国の長沙
「五一広場東漢簡牘」のうちの一枚
に書かれていました。

私は中国の古代、漢王朝（西暦前
二〇二～後二二〇年）の時代を研究
しています。秦の始皇帝と『三国
志』の時代の間、日本では弥生時代
に相当します。今から二〇〇〇年
ほども昔ですのでわからないこと
ばかりで、『史記』などの歴史書か
ら、王朝や重要な人物について知る
のがやっとです。歴史書は編纂者が
整理して著したものなので、わかつ
りやすいのはよいのですが、その
分、編纂者の意思によつて方向付け
られ、歪みが存在する可能性があり
ます。もっと新しい時代であれば、
さまざまな史料・歴史書が存在する
でしょうから、複数の史料にもとづ
き比較して研究することで、歪みを
修整することが可能ですが。しかし、
二二〇〇年前となると、現存する歴

した。日本の木簡は、紙のある時代に、紙と使いわけて使用されていましたが、中国の漢の時代、紙はまだ文字を書く対象として普及していませんでした。そのため、後代であれば紙に書くようなこと、たとえば書物や木簡は、失われた書籍や、歴史書にない記述を伝えてくれます。中国士大夫の研究者は、木簡の法律の書物や、役所の書類に注目して、読解を進めています。

私がとりくんでいるのが、この五一広場東漢簡牘と呼ばれる史料群です。五一広場は、出土地の名前で、長沙市の中心地にあります。二〇一〇年、同名の地下鉄の駅工事中に木簡が発見されました。出土した木簡は七〇〇〇枚近く、まだ四分の一程度しか公開されていません。出土地の周辺からは、前後する時代の木簡が大量に発見されています。このあたりは漢から三国時代の官庁街で、木簡は役人たちが廃棄した不要書類の一部だと考えられます。

百六十人を献ず』〔後漢書』東夷伝)のまさにその年号です。

後漢時代とは、儒教が社会に普及してゆく一方、中央では有力者が権力争いをくりひろげ、政治は腐敗する。地方では自然災害や異民族の反乱が多発し、庶民は苦しむ。華々しい英雄的人物はない。『三国志』の時代の前座のような、中国の歴史上でももつとも地味な時代の一つだと思います。私自身、後漢は暗くて、堅苦しくて、面白みにかけるという印象を持っており、研究対象としては避けておりました。

しかし、二〇一三年に五一広場東漢簡牘の一部が公開されました。私は、参加していた研究会でたまたま講読を担当し、この史料にひきこまれ、改めて後漢時代について考えてみたいと考えるようになりました。

五一広場東漢簡牘は、役所の廃棄書類の中でも、どうやら事件の取り調べに関するものが集中しているようです。最初に読んだ大筋は、注目



一九〇〇年前の事件記録

一八六四 + 八八一
『五一広場東漢簡牘(參)』中西書局
二〇一九

史書は限られます。歴史書編纂者描いた枠を現代の研究者がこえるとは困難です。

これに對して歴史書とは異なる角度から歴史を考える素材となるのを出土資料、なかでも木簡です。近年

「東漢」は、日本ではふつう後漢といいますが、漢王朝の後半にあります。役人たちは、書類に作成年月日等を記載していたので、いつ作られたものなのか知ることができます。年号では「永元」(八九く

古代学講座だより

◇令和二年

コロナ禍の古代学講座

古代学講座は二〇一一年に六講座を開講して以来、今年で十年目となる。四月からの前期講座では、十四講座を予定していた。ところが受講申し込みが始まる前日（二月二七日）に、内閣府より新型コロナウイルス感染症の発生を踏まえ、イベント開催への協力依頼があった。その時点でき開講していた前年度講座は、先生方と、約一六〇名の受講者の安全を最優先とし、すべて中止にしました。

その後も感染症の拡大は続き、四月十六日、緊急事態宣言が発出される。四月からの前期講座はすでに開講を断念していたが、受講者の方からも感染症が収束し、早く講座ができるよう祈っています。

こんなもどかしい時間を経て、ようやく緊急事態宣言の解除や、府県定員を減らし、机上に飛沫防止パーソン（写真）を設置した。換気を努め、除菌グッズも多種揃えた。講座の前後は部屋の設備や備品を消毒。感染者を出さないために、



毎日ス

ティホームや在宅勤務の話題を聞くようになり、京都市街からも人の姿が見られなくなつた。受講者の中にいて暇を持て余しているという方、反対にこの機会に古典を原文で読もうと悪戦苦闘する方も。それぞれ日々の過ごし方を模索しておられた。こんなとき、何か皆さんの学びをお手伝いできないか、そして自肅が明ければ、また講座に来ようと思つていただきたい。事務局で今できることを考えた結果、講師の先生方にご協力いただき、お勧めの本の情報を定期的にお送りすることにしました。講座に関係するものはもとより、タイムリーな感染症の歴史本や、若いころに読んで面白かった本など、先生のお人柄がわかるようなラインナップである。四月～六月まで五回発信して、毎回楽しみにしていると好評をいただいた。

西井芳子氏が入院先の病院で逝去された。満八十四歳。

七月二十八日早朝、当協会顧問・西井芳子氏は、一九三五年十月五日三重県伊勢市に生まれ、一九五八年京都女子大学文学部東洋史学科（日本史専攻）を卒業の後、同年、財団法人「白河院」吉川弘文館、一九九三年科御所と御影堂（古代学協会編『後第六号、一九七六年）、「丹後局」（人物日本の女性史、5）政権を動かした女たち』集英社、一九七七年）、「山連して」（『古代文化』第二十八卷紀要）第二輯、一九七一年）、「長保二年の東大寺返抄—大僧正雅慶に関する講座を、安全第一で続けたいと思う。志谷紀美子（古代学講座担当）

訃報

同氏は、一九三五年十月五日三重県伊勢市に生まれ、一九五八年京都女子大学文学部東洋史学科（日本史専攻）を卒業の後、同年、財団法人「白河院」吉川弘文館、一九九三年科御所と御影堂（古代学協会編『後第六号、一九七六年）、「丹後局」（人物日本の女性史、5）政権を動かした女たち』集英社、一九七七年）、「山連して」（『古代文化』第二十八卷紀要）第二輯、一九七一年）、「長保二年の東大寺返抄—大僧正雅慶に関する講座を、安全第一で続けたいと思う。志谷紀美子（古代学講座担当）

考えられる予防対策をしている。これから秋冬の後期講座が始まると、講師の先生方のご協力と、このような状況でも来てくださる受講者さんに感謝して、まだ続くコロナ禍の講座を、安全第一で続けたいと思う。

の歴史と共に歩まれた生涯であったといえよう。

また研究者としては平安博物館講師や古代学研究所講師を併任され、『賀茂保憲とその堪文』（『古代文化』第五巻第六号、一九六〇年）、『裏松固禅とその業績』（『平安博物館研究紀要』第二輯、一九七一年）、『長保二年の東大寺返抄—大僧正雅慶に関する講座を、安全第一で続けたいと思う。志谷紀美子（古代学講座担当）

特に平安博物館（一九六八年開館）創設のための準備においては、煩雑な事務作業をこなし、全国募金からも事業面からも支え続けた。館長として館長角田文衛博士を研究面活動にも大きな功績を残した平安博物館の停廃の後は、協会秘書室長などを経て、一九九六年に理事に就任、一九九九年には常務理事となり、協会の運営全体に大きな役割を果たされた。二〇一二年、任期満了に伴い協会理事を退任、顧問となられた。実に六十有余年、古代学協会

印 刷

発行者 604-8131 公益財團法人 古代学協会
発行日 令和二年九月二十日
創刊圖書出版社株式会社

（8）